

# スズキ・メソッド指導者の指導観に関する一考察

鈴木 雅 之

本著は、拙著、平成 26 年度年度博士論文「スズキ・メソッド指導者の指導観」の概要である。博士論文本文の「序章」「第 2 章 調査方法」「第 3 章 結果と考察」「第 4 章 総括的考察」を中心にまとめ、研究の方法、結果、今後の課題などを示した。

## 1. 研究の背景と目的

日本発祥の音楽教育「スズキ・メソッド」は、アメリカを中心に世界で高い評価を受ける一方、日本国内での理解度はそれほど高くはないといえよう。スズキ・メソッドは、音楽家・教育家である鈴木鎮一（1898-1998）の考案した音楽教育法である。発端は、鈴木が 1946 年に長野県松本市で結成した「全国幼児教育同志会」の才能教育運動である。「全国幼児教育同志会」は、1948 年に現在の名称である「才能教育会」に改称され、現在までスズキ・メソッドを実践してきた。

先述の通り、スズキ・メソッドはアメリカで特に高い評価を受けている。1964 年に行われた、日本のスズキ・メソッドの生徒 10 名による第 1 回訪米演奏旅行は、「スズキ・インパクト」Suzuki Impact としてマスコミ、教育、音楽関係者から高い評価を受ける。第 1 回訪米演奏旅行以降、スズキ・メソッドは、アメリカを中心に日本国外にも広がりを見せ始める。現在では、世界 46 ヶ国で約 40 万人、とりわけアメリカでは約 30 万人にのぼる生徒が、スズキ・メソッドを学習している。

国外で高い評価を受ける一方で、発祥の地日本におけるスズキ・メソッドの理解度は、必ずしも高いものであるとはいえない。日本国内におけるスズキ・メソッドの母体である公益社団法人才能教育研究会のホームページには、「海外では、国内をしのぐ高い評価を得ています」と明記されているほか、村尾（1995）や久保（2013）など複数の研究者が、スズキ・メソッドの評価は、日本国内よりも国外の方が高いと指摘している。

日本国内でスズキ・メソッドが必ずしも高い評価を受けない要因として、しばしば音楽教育としての脆弱性を指摘されることがある（久保 2013: 5）。具体例として、「スズキ・メソッドの生徒達は楽譜が読めない（豊田、中嶋、大島、秋山 2003: 15, 鈴木 2003: 77 など）」、「スズキ・メソッドの模倣による教育は、クローンのコピーの教育である（村尾 2003: 168）」「何百人もの子供が一斉

に演奏するのを忌避する人も多い（鈴木 2003: 75）」などの指摘が見受けられる。また、スズキ・メソッド、即ち鈴木 of の才能教育が、日本国内では正しく認識されておらず、天才教育や英才教育と誤解されていると述べている研究者も存在している（中嶋 1999: 39）。

このように日本国内では、鈴木 of の教育目的が正しく共有されず、器楽 of の早期教育程度 of の認識しかなされないのが現状だといえよう。筆者は、この現状 of の要因を探るために、日米 of のスズキ・メソッドに関する研究論文を対象とした先行研究を行った。

先行研究を概観した際に、スズキ・メソッドが日本国内であまり高い評価を受けていない要因 of の 1 つとして挙げられているのは、日本 of の教育観に関するものである（鈴木 2003: 77, 中嶋 1999: 41-43, 利根川 1999: 52-55 など）。中嶋や利根川は、競争主義が根強い日本で、鈴木 of の目指す音楽を通じた人間教育が理解されること of の難しさを指摘している。

一方で、スズキ・メソッド of の教育方法が正しく認識されなかったことについては、スズキ・メソッド関係者側 of の問題点であるという指摘も存在している（中嶋 1999: 39, 豊田、中嶋、大島、秋山 2003: 27）。日本国内 of のスズキ・メソッドに対する鈴木 of の影響力は、極めて大きいものである。このことは、「鈴木メソッドは、その名のとおり、鈴木個人 of の考え方をきわめて色濃く反映した教育システムであるといえる（中山 2003: 117）。」「才能教育というのは、まさに鈴木先生 of の個性そのものであった（中嶋 2009: 116-117）。」「鈴木 of の『個性そのもの』として理解されてきたことは、鈴木 of の存在自体に絶対的な力を与えてきたといえる（久保 2013: 29）。」など、複数の研究によって指摘されていることである。

さらに、「鈴木は、自分自身 of の教育法について文章化することを好まず、仲間の教師たちと直接にかたり実践していくこと of を好んだ（桂 2012: 9）」とされており、スズキ・メソッドに関する体系的な教育方法 of の記述は、鈴木 of の著書の中にも明記されていない（桂 2012: 9）。つまり、スズキ・メソッドは、「メソッド」即ち教育法とされながら、明確な方法論が明らかにされていないのである。

総括すると、指導者達に絶対 of の影響力を与えていた鈴木は、自身 of の教育法を著書に残すことを好まずに没したということになる。そのため、スズキ・メソッドは、鈴木と彼から影響を受けた指導者達の中では、指導観や具体的な指導法が共有されたものの、才能教育研究会内で完結してしまっており、外部に発信されることは困難な状況にあるといえる。このことが、日本国内でスズキ・メソッド of の理解度が低い最大の要因であり、中嶋ら（1999: 39）が指摘する「スズキ・メソッド関係者側 of の問題点」であろう。

桂（2012）は、スズキ・メソッドを「鈴木鎮一という個人 of の思想と実践とに共鳴した多くの教師たちが、全体として達成し今日実践しているスズキメソッドは、その教師集団における日常的な文化伝承によって維持されるユニークな共同教育実践（桂 2012: 9）」であるとし、教師達 of のありかた

や行動をつくる基盤となっている「価値、規範、行動原理」を「教師文化」と称している（桂 2012: 10）。鈴木の没後 15 年が経過した今でも、鈴木の実践した教育法や本質は、指導者同士の文化として、指導者達の中に内在しているものであると考えられる。このことから、スズキ・メソードの実践や教育法を知るうえで最も有効な方法は、スズキ・メソードの指導者に内在するものを対象とした調査を行うことであると判断した。本研究では、スズキ・メソードの指導者を対象とした面接調査を行い、指導者達に内在するスズキ・メソードの実践や教育法を探ることとする。

先述の通り、スズキ・メソードは日本国外において非常に高く評価されている、日本が誇る音楽文化の 1 つである。一方で、発祥国である日本国内において、鈴木没後 15 年が経過した今日でも、スズキ・メソードの実践や教育法について明文化されたものが少ないことは大いに問題であると考えられる。日本国内でスズキ・メソードに対する正しい認識を広げることや、若手の指導者やこれからスズキ・メソードの指導者になることを志す人達への教育的支援を行う観点からも、スズキ・メソードの実践や教育法について明文化を行うことは、意義あることと考えた。筆者はスズキ・メソード指導者が自分自身に課す目標や指導法、思想などを「スズキ・メソード指導者の指導観」と定義し、研究における目的を次の 2 つに定めた。

- ①スズキ・メソードの指導者間におけるスズキ・メソードの指導観を明らかにする。
- ②スズキ・メソードの指導者は、どのように指導力を形成していくのかについて、指導経験の積み重ねによる学習過程の統合モデルを構築する。

## 2. 研究方法

次に、研究方法を考察する。本研究の目的を達成する際に、より有効な手段は「量的研究」より「質的研究」であると判断した。理由は次の通りである。①日本国内では、スズキ・メソードの指導現場を対象とした研究例が少ないため、仮説をたてるのが難しい。そのため、仮説の検証に優れた「量的研究」より探索的な研究に優れた「質的研究」がより有用であると判断した。②「量的研究」は、全体の傾向をより科学的に検証することに優れている。対して「質的研究」は、データが量的研究より具体的であるという特徴を持つ。日本国内においては、スズキ・メソードの研究例の少なさから、若手の指導者やこれからスズキ・メソードの指導者になることを志す人達への教育的支援となる著書がそれほど多くは存在していない。若手の指導者やこれからスズキ・メソードの指導者になることを志す人達への支援となり得るのは、スズキ・メソードの指導者全体の傾向よりも、先輩指導者の実践や経験から得られた、より具体的なデータであると判断した。

これらの理由から、本研究においては、スズキ・メソード指導者を対象とした面接調査を行い、質的研究による分析を行うこととした。具体的な分析法については、後述する。

なお、本研究においては、対象をスズキ・メソードの「若手指導者群」と「ベテラン指導者」の

2群に分けて行うこととした。理由は次の通りである。①先述の通り、日本国内におけるスズキ・メソッドは、鈴木の影響力が非常に大きいものであった。このことから、鈴木から直接指導や示唆を受ける機会のあった指導者と、そのような機会を持ち得なかった指導者の間に、指導観の相違が存在する可能性が考えられる。桂（2012）も、スズキ・メソッド指導者を世代別に比較することの必要性を説いている。②一般に教師（本論文における指導者と同義）とは、成長する存在と把握されており、養成の段階から、そのキャリアを終えるまで、常に成長を志向し、成長のための課題を持っているとされている（木原 2004: 7）。このことから、スズキ・メソッドにおいても、若手指導者とベテラン指導者の間に、指導観の差異が予想されるため。

以上の理由から、本研究においては、「若手指導者群」と「ベテラン指導者」の2群を対象として調査を行う。なお、「若手指導者群」と「ベテラン指導者」の定義については、後述する。

面接法には、「半構造化面接法」を用いた。「半構造化面接法」は、予め質問文や答え方が決まっている「構造化面接法」と、事前に質問を決めずに行う「非構造化面接法」の中間に位置する面接法である。面接の流れに応じて質問の順番を変えたり、新たに質問を加えるなど、柔軟な変更が可能であり、質問内容が決まっているがどのような回答がもどってくるか不明な場合に有用である。本研究の場合、スズキ・メソッド指導者の指導観を明らかにするという明確な目的が定まっているため、質問の内容は構築しやすいといえよう。一方で、研究事例の少なさから、どのような回答が戻ってくるか予想することは難しい。これらの観点から、面接法には「半構造化面接法」を採用した。

面接調査における質問項目の内容は、〔表 1〕の通りである。

〔表 1〕半構造化面接における質問項目

1	スズキ・メソッドについて、先生はどのようにお考えですか？
2	先生は、生徒さんに対して、どのような目標を持って指導に臨んでいらっしゃいますか？
3	その目標を達成するために、どのような工夫をしていらっしゃいますか？
4	スズキの指導者として、ご自身で心掛けていらっしゃることは、ございますか？
5	スズキ・メソッドの指導の中で、読譜の勉強は必要だとお考えですか？
6-①	生徒さんに読譜のご指導をなさっていますか？
-②	「はい」とお答えになった先生方にご質問です。 読譜の指導を始める明確な時期をお決めになっていますか？
-③	「はい」とお答えになった先生方にご質問です。 読譜の具体的な指導方法を教えてください。
-④	「いいえ」とお答えになった先生方にご質問です。 曲が難しくなった際、生徒さんにどのように曲を覚えさせていらっしゃいますか？
7	卒業制度について、どのようにお考えですか？
8	先生がお考えの、スズキ・メソッドの特に優れた点をお教え下さい。
9	先生がお考えの、スズキ・メソッドの課題などについてお教え下さい。

質問項目の1、2、3、4、8、9は、指導者の指導観に関する質問である。質問項目の5、6、7は、スズキ・メソッドの指導法において、問題点を指摘されることが多い内容に関する質問である。

質問項目5、6は、読譜学習に関する質問である。先述の通り、日本国内では、「スズキ・メソッドの生徒達は楽譜が読めない（豊田、中嶋、大島、秋山 2003: 15, 鈴木 2003: 77 など）」と指摘されることが多い。

項目7の「卒業制度」とは、スズキ・メソッド独特の指導法である。スズキ・メソッドでは、全科に、前期初等科から研究科まで数段階の課程が定められており、各課程には、卒業の課題曲が存在している。卒業課題曲まで学習が進んだ生徒は、レッスン中に録音を行い、才能教育研究会本部に音源を提出する。毎年11月末の提出締め切り後、各科指導者から選出された検定員達が分担して、提出者全員分の聴取・検定を行う。聴取・検定後、検定員のコメント付きでテープが返却され、生徒は現在の課の卒業を認定される。この制度は、生徒の動機づけを目的に行われており、音源の提出によって原則卒業が認められている。近年、スズキ・メソッド指導者の間でこの「卒業制度」の問題が度々議題に挙げられている（才能教育研究会指導者研究会プログラム 2013、2014）。「提出により原則合格が認められる」というシステムに関して、提出された音源の評価方法や、合否の基準などが問題となっているようである。

読譜学習や卒業制度は、スズキ・メソッド内外で特に問題視されている指導法であり、指導者のこれらの指導法に対する考えは、スズキ・メソッドの指導法を知るうえで特に意味のあることだと考えられる。また、これらの問題に対する指導経験が不足しているであろう若手指導者達に対し、経験を多く積んでいる指導者達の認識や経験を示すことで、教育的支援を与えることも期待されよう。

上記の内容で行った面接から得られたデータを分析するにあたり、「理論生成型の分析方法」の一手法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ Grounded Theory Approach（以下、GTA とする）を用いた。分析にGTAを用いた理由は以下の通りである。

第1に、GTAは、質的研究において、データに密着した分析を行い、結果を理論としてまとめることが出来る分析法である（木下 2011: 9）。先述の通り、本研究においては質的研究を採用している。第2に、GTAは、実践的活用を明確に意図した研究方法として考案されたものである。GTAから得られた結果は、データを収集した場に返され、応用者（本研究の場合、スズキ・メソッドの現場の指導者）に理解・修正・応用されることを重視している（木下 2011: 29）。この点から、スズキ・メソッドの現場における教育的支援が期待される。第3に、GTAは、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に有効な分析方法である（木下 2011: 27）。本研究においては、社会的相互作用がスズキ・メソッド指導者と生徒や親にあたり、人間行動が指導者によるレッスンにあたりと考えられた。

GTAには複数の型が存在しているが、本研究においては、木下（2011）が考案した修正版グラ

ウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach（以下、M-GTA とする）を採用した。M-GTA を選択した理由は、次の通りである。① M-GTA は、グラウンデッド・セオリー・アプローチに修正を加え、より客観的な分析が可能とされている。② M-GTA は、限定された範囲内（本研究の場合、スズキ・メソッドの指導現場）における人間の行動の説明と予測に関して優れた説明力を持つものとされている。③ M-GTA は、プロセス的性格を持っている研究に適した分析法である。本研究においては、指導者の力量形成がプロセス的性格を持っており、分析法に相応しいと判断できる。④ M-GTA は、データの切片化を行わないコーディング方法がとられている。M-GTA 以外の GTA による分析は、切片化により、対象者の文脈の意図を損なう恐れがある。

本研究では、以下の手順で調査、分析を行うこととした。

- (1) 研究協力者の合意のもと、実施日時、場所を決定し、半構造化面接法による面接を行った。面接内容はボイスレコーダーに録音した。面接は、筆者自身が行った。調査にあたっては、研究の趣旨や目的、データの扱い方、録音を行うこと、研究協力者のプライバシーの保護などを丁寧に説明し、研究協力者の了解を得た。
- (2) 録音した音源から、トランスクリプトの作成を行った。トランスクリプションは筆者が行った。トランスクリプトから、指導観に関係があると判断した箇所を抽出し、コーディングした。抽出した部分を「具体例」、つけたコードを「概念」として扱った。トランスクリプトの分析にあたっては、正確さを期する意味から、筆者と本学音楽教育学科の教員 1 名とで検討を行った。
- (3) 「若手指導者群」「ベテラン指導者群」両群で、各概念間の関係性を検討し、概念のカテゴリー化を行い、概念とカテゴリーの関連図の作成を行った。

本調査を実施する前に、研究法の妥当性を確認するための予備調査を行った。予備調査対象者は、スズキ・メソッド指導歴 5 年以内の 20 歳代のピアノ科指導者と 30 歳代のヴァイオリン指導者の 2 名である。調査期間は 2012 年 12 月から 2013 年 3 月であった。予備調査の結果、概念の抽出、概念のカテゴリー化、関連図の作成は問題なく行えたため、研究方法は妥当であると判断した。また、本調査において質問項目を 2 つ追加することとした。項目は次の 2 つである。

1. スズキ・メソッドの指導者になる前の音楽経歴を簡単に教えてください。
2. 質問項目以外で何かお話しただけることがあれば教えてください。

「1. スズキ・メソッドの指導者になる前の音楽経歴を簡単に教えてください。」については、予備調査から、対象者のライフストーリーが教育哲学に影響を与える可能性が示唆されたことから追加した。なお、対象者のプライバシーなどに関して、倫理的問題にふれる質問や表現は一切行わな

いこととする。「2. 質問項目以外で何かお話しただけることがあれば教えてください。」については、「限られた質問だけでは述べる機会のない意見がある」という予備調査対象者からの指摘を参考にし、追加した。本研究の分析に用いられる M-GTA は、性質上、質問項目以外の内容もデータとして扱うことが可能な分析法である。質問項目以外の内容から新たなデータが抽出される可能性を考え、本調査においては質問項目終了後に、対象者に自由な発言を求めることとした。

本調査の面接調査期間は、調査期間は 2013 年 5 月から 2014 年 8 月であった。研究協力者は、若手指導者 5 名、ベテラン指導者 10 名の合計 15 名である。研究協力者一覧は、**〔表 2〕** の通りである。

**〔表 2〕 本調査における研究協力者一覧**

対象者	性別	年齢	指導歴	楽器	グループ名
1	女	30 歳代	1 年	ピアノ	若手指導者群
2	女	20 歳代	1 年	ヴァイオリン	若手指導者群
3	女	20 歳代	1 年	ピアノ	若手指導者群
4	男	20 歳代	2 年	チェロ	若手指導者群
5	女	20 歳代	1 年	ヴァイオリン	若手指導者群
6	女	40 歳代	16 年	ピアノ	ベテラン指導者群
7	女	40 歳代	17 年	ピアノ	ベテラン指導者群
8	女	40 歳代	18 年	ヴァイオリン	ベテラン指導者群
9	女	40 歳代	15 年	フルート	ベテラン指導者群
10	女	40 歳代	18 年	ヴァイオリン	ベテラン指導者群
11	女	70 歳代	48 年	ヴァイオリン	ベテラン指導者群
12	女	70 歳代	47 年	ピアノ	ベテラン指導者群
13	男	60 歳代	33 年	チェロ	ベテラン指導者群
14	女	70 歳代	40 年	ヴァイオリン	ベテラン指導者群
15	女	70 歳代	30 年	ピアノ	ベテラン指導者群

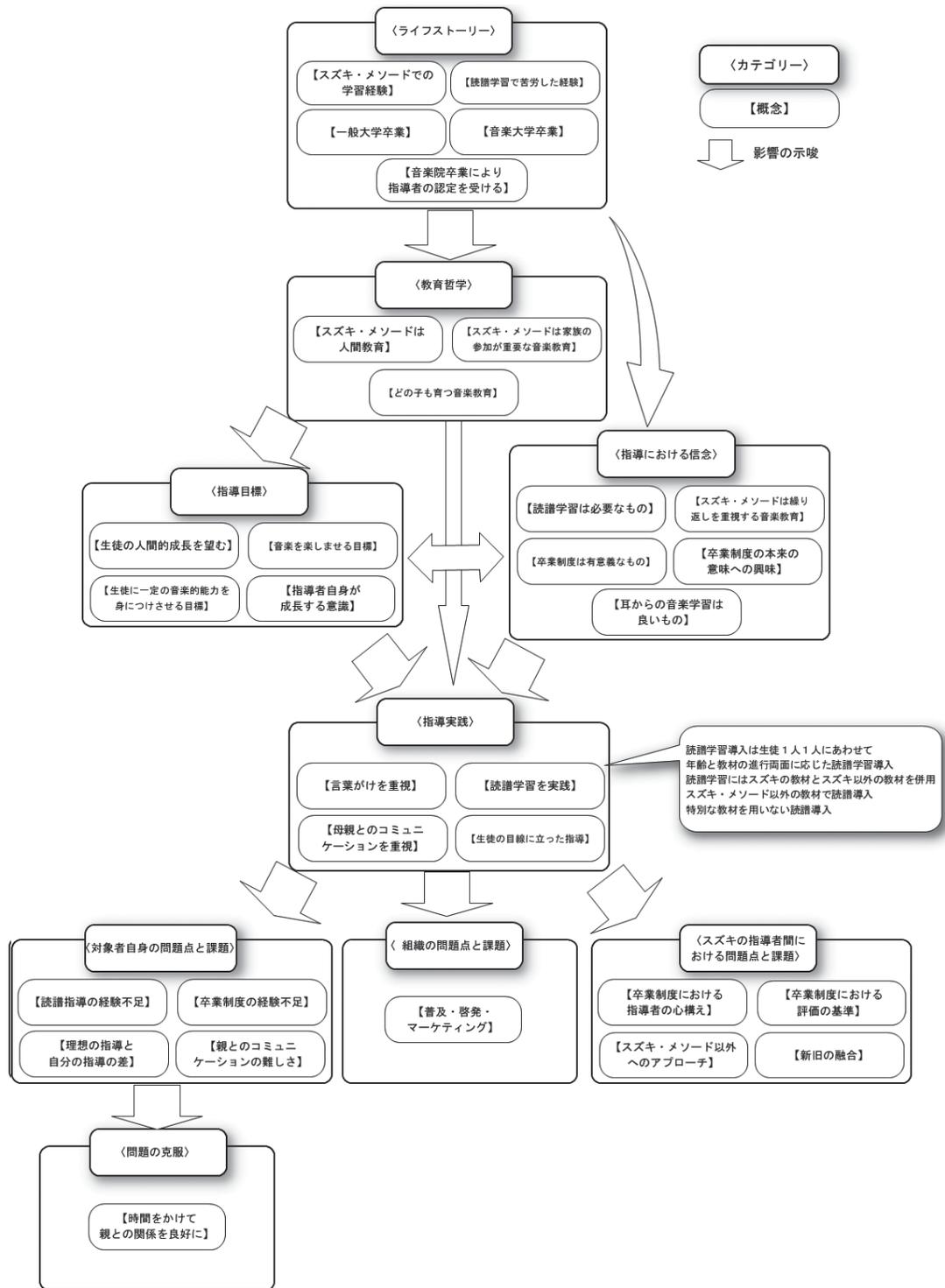
### 3. 研究結果

若手指導者群（対象者 1 から 5）5 名から抽出された概念は次の通りである。若手指導者群は、1999 年以降に指導者の認定を受けた 20 歳代または 30 歳代の指導者群である。M-GTA による分析の結果、31 の【概念】が生成され、更にそれらを以下の 9 つに〈カテゴリー〉化した。

〈カテゴリー 1〉 ライフストーリー

- 〈カテゴリー 2〉 教育哲学
- 〈カテゴリー 3〉 指導目標
- 〈カテゴリー 4〉 指導における信念
- 〈カテゴリー 5〉 指導実践
- 〈カテゴリー 6〉 対象者自身の問題点と課題
- 〈カテゴリー 7〉 組織の問題点と課題
- 〈カテゴリー 8〉 スズキの指導者間における問題点と課題
- 〈カテゴリー 9〉 問題の克服

抽出された【概念】と〈カテゴリー〉の関連図は、[図 1] の通りである。[図 1] の考察は、76 頁に示した。



〔図1〕若手指導者群から生成された【概念】と〈カテゴリー〉の関連図

対象者5名は全員、幼少時にスズキ・メソッドでの学習経験を持っていた。スズキ・メソッドで学習中に読譜学習で苦勞をした対象者が存在しており、その経験が読譜学習に関する指導の信念に影響を与えている例が存在した。出身大学については、一般大学卒業の対象者と音楽大学卒業の対象者が存在していたが、その後は全ての対象者が国際スズキ・メソッド音楽院を経て指導者の認定を受けている。

教育哲学については、鈴木を重視したものが挙げられた。また、教育哲学は、指導目標や指導実践に影響を与えていることが示唆された。指導目標は、生徒の人間の成長や音楽を楽しむこと、指導者自身が成長すること等であった。音楽的能力の向上も目標の1つとして挙げられたが、音楽的能力の向上のみを指導目標にしている対象者は存在していなかった。

指導における信念については、読譜学習や卒業制度の意義、繰り返しや耳からの学習の重視といったものが挙げられた。読譜学習や卒業制度については、否定的な意見は存在しなかった。ただし、卒業制度については、鈴木存命中の制度の意図を再確認すべきという考えが存在していた。

指導実践においては、生徒に対する言葉がけや、母親とのコミュニケーションの重視、生徒の目線に立った指導などが挙げられた。指導の機会を得ていない対象者以外は、全員が読譜学習を行っていることが明らかになった。ただし、導入の時期や教材などは対象者毎に異なっており、読譜に関する明確な指導法や方法論は存在していないことが示唆された。

指導上の問題点と課題に関しては、経験不足からくるものが複数挙げられた。一方で、時間をかけて指導上の苦手意識を克服した対象者も存在していた。経験を積むことで、苦手意識の克服が出来ることが示唆されたことは、若手指導者達にとって教育的支援となり得るものであろう。

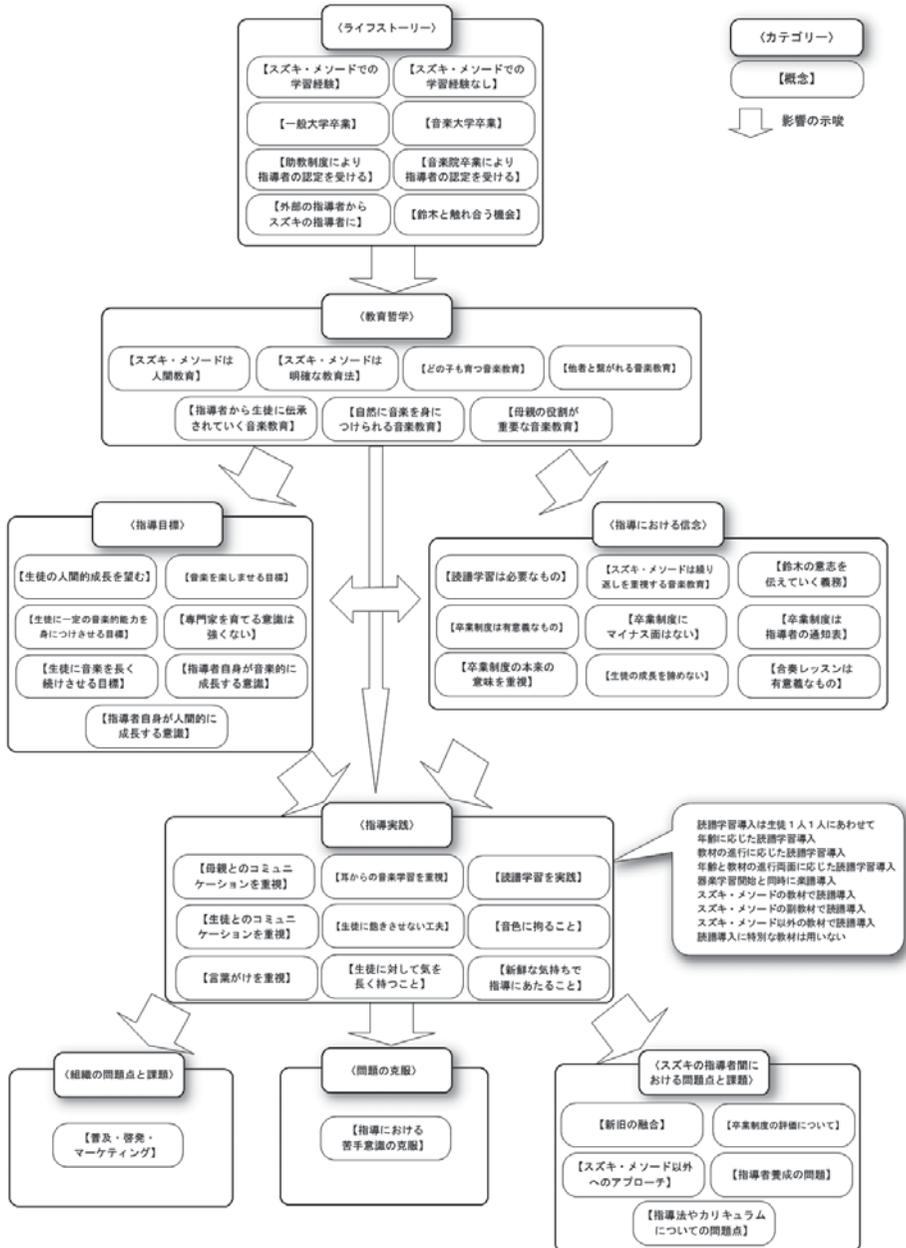
対象者自身の問題点と課題以外で挙げられたものが、組織の問題点と課題及び、指導者間における問題点と課題である。具体的内容は、卒業制度に関する評価や指導者の心構えの問題点、今後のスズキ・メソッドの課題などであった。

ベテラン指導者群（対象者6から15）10名から抽出された概念は次の通りである。ベテラン指導者群は、スズキ・メソッド指導歴15年以上の指導者群である。M-GTAによる分析の結果、47の【概念】が生成され、更にそれらを以下の8つに〈カテゴリー〉化した。

- 〈カテゴリー1〉 ライフストーリー
- 〈カテゴリー2〉 教育哲学
- 〈カテゴリー3〉 指導目標
- 〈カテゴリー4〉 指導における信念
- 〈カテゴリー5〉 指導実践
- 〈カテゴリー6〉 組織の問題点と課題
- 〈カテゴリー7〉 問題の克服

〈カテゴリー 8〉 スズキの指導者間における問題点と課題

抽出された【概念】と〈カテゴリー〉の関連図は、〔図 2〕の通りである。〔図 2〕の考察は、78 頁に示した。



〔図 2〕 ベテラン指導者群から生成された【概念】と〈カテゴリー〉の関連図

ベテラン指導者群のライフストーリーにおいては、スズキ・メソードの学習経験の有無、出身大学、指導者認定の経緯などに、それぞれ複数の概念が存在した。このことから、ベテラン指導者は、指導者認定前のライフストーリーが多岐に渡ることが明らかになった。対象者の中には、鈴木から直接話を聞いたり、レッスンを受けた者も存在していた。年齢の観点から、ベテラン指導者特有の例といえよう。

教育哲学については、鈴木の哲学を重視したものや、対象者のライフストーリーから影響を受けたと考えられるものが存在した。指導目標には、生徒の人間的な成長を望むものや、音楽能力の向上を望むもの、指導者自身が成長を望むものなどが挙げられた。

指導における信念については、鈴木の哲学や理念を重視したものや、卒業制度や合奏レッスンといったスズキ・メソード独特のシステムの意義などが挙げられた。読譜学習、卒業制度、合奏レッスンなどに対する否定的な意見は存在していなかった。ただし、卒業制度に関しては、指導者側の責任を重視する意見や、鈴木存命中の制度の意味を重視する意見なども挙げられた。

指導実践においては、母親や生徒とのコミュニケーションなどの対人関係における工夫や、耳からの音楽学習や音色への拘りといった指導法に関する工夫、生徒に対して気を長く持つことや新鮮な気持ちを持って指導にあたるといった指導者自身の心構えなどが挙げられた。また、対象者10名全員が、読譜指導を行っていることが明らかになった。ただし、導入の時期や教材などは対象者毎に異なっており、読譜に関する明確な指導法や方法論は存在していないことが示唆された。

指導を実践する上で、指導者が自分自身に対して問題点や疑問を持っている概念は抽出されなかった。また、指導年数の経過により、指導上の苦手意識を克服したと述べる対象者が複数存在した。

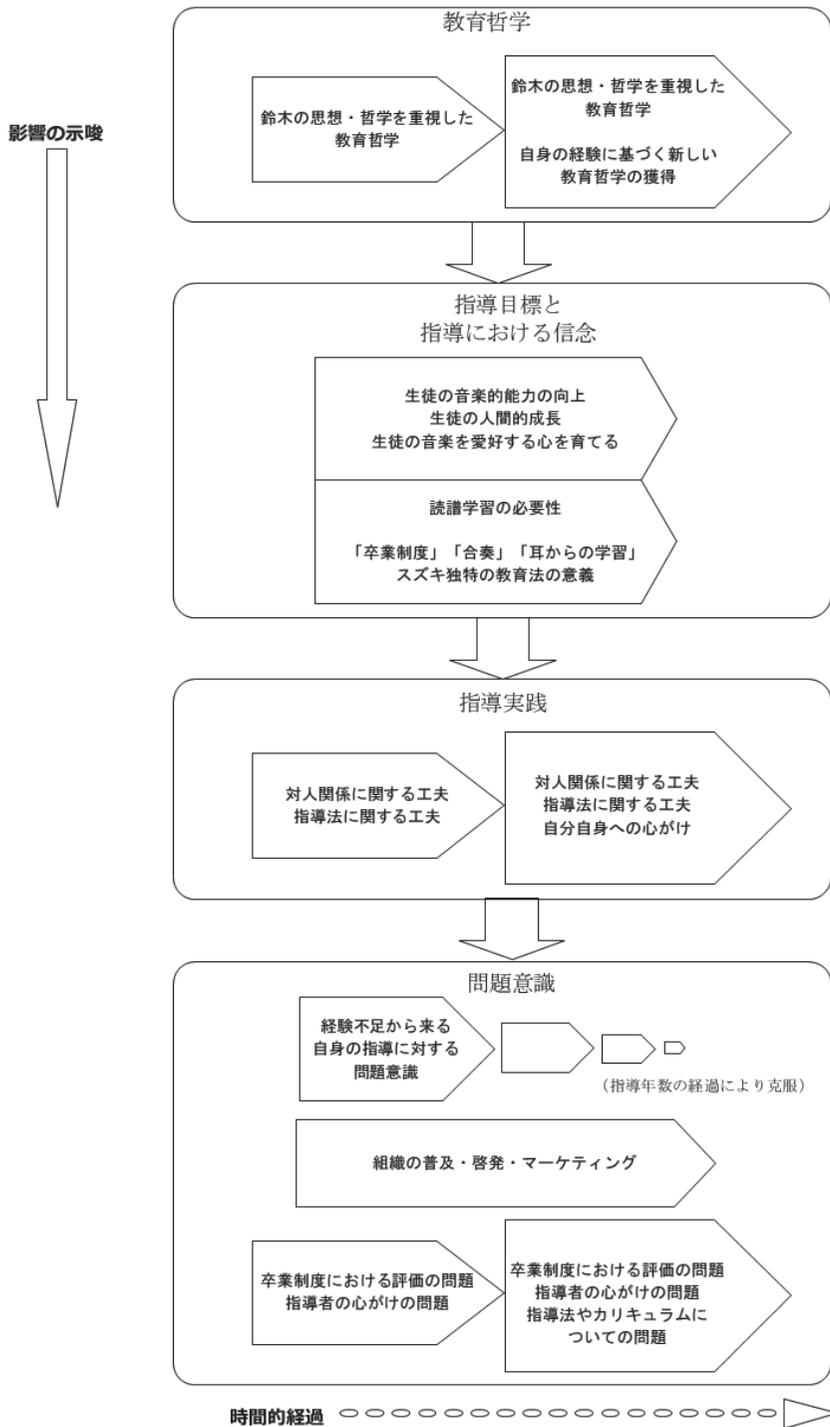
対象者が問題点や課題として挙げたのが、組織の問題点と課題と、指導者間における問題点と課題である。卒業制度に関する評価の問題や、カリキュラムの問題など、指導実践に関するものや、指導者の養成やスズキ・メソード以外へのアプローチの仕方など、今後のスズキ・メソードの問題などが挙げられた。

若手指導者群とベテラン指導者群の比較を通じた考察から、スズキ・メソード指導者に関する指導観と学習過程の統合モデルを作成し、**【図3】**に示した。**【図3】**の考察は、80～81頁に示した。

図中では、左から右に時間が経過している。即ち、左側が若手指導者の傾向、右側がベテラン指導者の傾向である。

図中の上から下への矢印は、カテゴリーからカテゴリーの影響が示唆されたものである。

図中の五角形の拡大は、概念や具体例の拡大を、五角形の縮小は、概念や具体例の減少や消滅を表している。五角形の大きさに変化がないものは、時間的経過に応じて大きな変化が見受けられなかったカテゴリーである。



〔図 3〕 スズキ・メソッド指導者の指導観と学習過程の統合モデル

### 3-1. 教育哲学

〈教育哲学〉に関しては、若手指導者群もベテラン指導者群も、鈴木の思想哲学を重視した教育哲学を持ち、指導に臨んでいることが明らかになった。また、指導年数の経過により、自身の経験に基づく新しい教育哲学が獲得されることも示唆された。

### 3-2. 指導目標と指導における信念

〈指導目標〉と〈指導における信念〉に関しては、指導年数の差異による変化はあまり見受けられなかった。〈指導目標〉に関しては、若手指導者群もベテラン指導者群も、音楽的能力の向上のみでなく、生徒を人間的に成長させることや、生徒の音楽を愛好する心を育てることを目標に指導に臨んでいることが分かった。〈指導における信念〉においては、若手指導者群もベテラン指導者群も、「卒業制度」「合奏」「耳からの学習」などの、スズキ・メソッド特有の教育法に意義を感じていることが明らかになった。また、これらの指導法を、生徒の人間的成長や、音楽を愛好する心を育てるといった指導目標の手段として用いていることが示唆された。

一般にスズキ・メソッドの問題点とされる読譜学習については、両群の対象者とも読譜学習を必要なものと考えていることが分かった。

### 3-3. 指導実践

〈指導実践〉に関しては、若手指導者群もベテラン指導者群も、生徒や親とのコミュニケーションなどの対人関係に関する工夫を行っていることが分かった。両群で指導法に関する工夫が挙げられたほか、読譜学習については対象者全員が実践していた。ただし、読譜学習の指導法に関しては、導入時期についても教材についても様々であった。指導年数の経過により、指導者が自分自身に何かしらの心がけを課して指導に臨む傾向が見受けられた。

一方で、桂（2013）や久保（2013）が示唆したように、明確な方法論の概念は抽出されなかった。

### 3-4. 問題意識

対象者達の問題意識には、3つのカテゴリーが存在した。〈対象者自身の問題点と課題〉〈組織の問題点と課題〉〈スズキの指導者間における問題点と課題〉である。〈対象者自身の問題点と課題〉は若手指導者特有の問題意識である。これらは主に、経験不足から来るものであり、指導年数の経過により克服されることが示唆された。〈組織の問題点と課題〉に関しては、若手指導者群もベテラン指導者群も、普及・啓発・マーケティングを問題点として挙げた。〈スズキの指導者間におけ

る問題点と課題〉については、若手指導者群もベテラン指導者群も、卒業制度における評価について問題意識を持っていた。また両群とも、指導や経営に関する考え方を改善していくべきだといった、指導者達の心がけに関しても問題意識を持っていることが分かった。また、ベテラン指導者特有の問題意識として、指導法（具体的には音楽的能力の基礎力と読譜に関して）とカリキュラム（具体的には卒業制度終了後のカリキュラムに関して）に関するものが挙げられた。

#### 4. 結論

本研究の総括を行う。初めに、本論文のオリジナリティは、次の3点である。①これまで研究対象とされることの少なかった、スズキ・メソード指導者を対象とした研究、②研究協力者に対する面接調査からのデータ生成、③スズキ・メソード指導者の学習過程における統合モデルの生成。

本研究の結果から強調したいことは次の3点である。①スズキ・メソードの指導者は、世代や指導年数の差異に関わらず、哲学・指導目標・信念・指導法といった多くの指導観を共有していることが示唆された。②一般に教師とは、成長する存在だと把握されている。スズキ・メソードの指導現場でも、指導年数の経過により、指導に対する自信や判断力が形成されることが示唆された。③鈴木没後15年以上が経過した今、スズキ・メソードの伝統として残すべきものと、改善を行うべきものを、全指導者間で共有する必要性を強く感じた。

本研究で用いたM-GTAは、対象者の発話とデータと扱うことから、具体的なデータを収集することに優れている。一方で、調査方法の形態から、多くのデータを収集することは難しく、今回の研究で得られたデータは、仮説的・限定的なものである。先述の通り、スズキ・メソードは、指導者を対象とした研究事例がほとんど見受けられない。今後は、本研究で得られたデータを用い、多数の指導者を対象とした量的調査も行いたいと考えている。より多くの指導者を対象とした調査を行うことで、更に客観的で明確なスズキ・メソード指導者の指導観が明らかにされよう。

#### ■引用文献・参考文献■

- ・浅田匡・生田孝至・藤岡完治 1999 『成長する教師—教師学への誘い』東京：金子書房。
- ・大島眞・秋山博介編 2003 『現代のエスプリ 428 才能教育の展開』東京：至文堂。
- ・桂直美 2012 「『スズキメソード』の教育理念—ナラティブ分析による教師文化研究試論—」『東洋大学文学部紀要 第66集 教育学科編 XXXVIII』9-16。
- ・木下康仁 2011 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』東京：弘文堂。

- ・木原俊行 2004 『授業研究と教師の成長』大阪：日本文教出版。
- ・木村優 2010 「協働学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけと教育心理学研究の関連—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる現象モデルの生成—」『教育心理学研究 58 号』東京：一般財団法人 日本教育心理学会、464-479。
- ・久保絵里麻 2013 『鈴木鎮一と才能教育—その形成史と本質の解明—』東京：明治学院大学大学院文学研究科博士論文。
- ・公益社団法人才能教育研究会 2013 『全国指導者研究会プログラム』。
- ・公益社団法人才能教育研究会 2014 『全国指導者研究会プログラム』。
- ・坂本篤史 2013 『共同的な省察場面を通じた教師の学習過程』東京：風間書房。
- ・佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美 1990 「教師の実践的思考様式に関する研究—熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に—」『東京大学教育学部紀要 30』177-198。
- ・篠原秀夫 1992 「音楽科教師の力量形成に関する一考察—意思決定を中心に—」『北海道大学紀要 43(1)』333-344。
- ・社団法人才能教育研究会 / スズキ・メソッド学術研究会 1999 『21 世紀の感性教育—スズキ・メソッドの理論と背景—』兵庫：六甲出版。
- ・鈴木淳子 2012 『調査的面接の技法 第 2 版』京都：ナカニシヤ出版。
- ・鈴木鎮一 1958 『人間と才能』東京：大東京社。
- ・鈴木鎮一 1960 『歩いて来た道』東京：音楽之友社。
- ・鈴木鎮一 1976 『[増補版] 才能開発は 0 歳から』東京：主婦の友社。
- ・鈴木鎮一 2003 「才能は生まれつきではない」野村幸治・中山裕一郎編著『音楽教育を読む』東京：音楽之友社 113-117。
- ・鈴木鎮一 2007a 『愛に生きる』東京：講談社現代新書。
- ・鈴木鎮一 2007b 『奏法の哲学』東京：全音楽譜出版社。
- ・鈴木鎮一 2008 『バイオリンの教育法 復刻版』東京：全音楽譜出版社。
- ・鈴木鎮一 2010 『幼児の才能教育』東京：明治図書。
- ・鈴木正幸 1999 「日本の音楽教育とスズキ・メソッド」『21 世紀の感性教育—スズキ・メソッドの理論と背景—』神戸：六甲出版 135-152。
- ・鈴木正幸 2003 「『感育』とスズキ・メソッド」『現代のエスプリ 428 才能教育の展開』東京：至文堂 66-78。
- ・高見仁志 2014 『音楽科における教師の力量形成』東京：ミネルヴァ書房。
- ・瀧川淳 2007 『音楽教師の行為と省察—反省的実践の批判的検討を通じた身体知の考察』東京芸術大学博士論文。
- ・徳舂克幸 2007 「若手小学校教師の実践共同体への参加の軌跡」『教育心理学研究 55 号』34-47。
- ・ドナルド・ショーン／佐藤学・秋田喜代美訳 2001 『専門家の知恵—反省的実践者は行為しな

- がら考える』東京：ゆるみ出版 [Schön, D. 1984 *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. USA: Basic Books].
- ・豊田耕兒・中嶋嶺雄・大島眞・秋山博介 2003 「座談会スズキ・メソードの今日的意義」『現代のエスプリ 428 才能教育の展開』東京：至文堂 5-28。
  - ・中嶋嶺雄 1999 「才能教育を考える」『21世紀の感性教育—スズキ・メソードの理論と背景』神戸：六甲出版 37-46。
  - ・中山裕一郎 2005 「音楽の才能教育」開成出版『音楽教育史 第I巻 音楽の思想と教育』225-233。
  - ・中山裕一郎 2005 「国内外の主要音楽事典にみるスズキ・メソードに関する記述と日本における音楽教育研究の現状について」『信州大学・才能教育共同研究会報告書 No. 1』39-42。
  - ・中山裕一郎 2006 「音楽教育における〈創造的〉表現活動を支えるもの」『信州大学・才能教育共同研究会報告書 No. 2』2-7。
  - ・西園芳信 2005 『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究—「芸術の知」の能力の育成を目的として—』東京：風間書房。
  - ・パーンカット, リチャード、マクファーソン, ゲーリー・E 編 / 安達真由美・小川容子監訳 2011 『演奏を支える心と科学』東京：誠信書房 [Parncutt, R/McPherson, G. E. 2002. *The Science & Psychology of Music Performance*. USA: Oxford University Press.].
  - ・藤岡完治・澤本和子編著 1999 『授業で成長する教師』東京：ぎょうせい。
  - ・藤澤伸介 2004 『「反省的实践家」としての教師の学習指導力の形成過程』東京：風間書房。
  - ・藤原顕 2007 「現代教師論の原点—学校教師の自律的な力量形成を中心に」『学びのための教師論』頸草書房 1-25。
  - ・本多正明 2004 『音楽の車—鈴木鎮一の生涯と才能教育運動によせて』東京：全音楽譜出版社。
  - ・マクドナルド, D. T.、サイモンズ, G. M./ 神原雅之・難波正明・里村生英・渡邊均・吉永早苗共訳 1999 『音楽の成長と発達—誕生から6歳まで』広島：溪水社。[McDonald, D. T./Simons, G. M. 1989 *Musical growth and development birth through six*].
  - ・マクファーソン, ゲーリー・E.、ガブリエルソン, アルフ / 小川容子・山崎晃男訳 2011 「音から音符へ」『演奏を支える心と科学』東京：誠信書房、148-171。[McPherson, G. E./Gabrielsson, A. 2011. “Sound to Sign”].
  - ・三橋さゆり 2013 『児童の歌唱における表現の形成過程に関する研究—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて』東京芸術大学博士論文。
  - ・村尾忠廣 1995 「鈴木メソードの意味—歌留多と型と家元制度をめぐって」音楽之友社『音楽芸術』第53巻、1995年9月号：27-29。
  - ・村尾忠廣 2003 「スズキ・メソード『キラキラ星変奏曲』に見る『型からの学習』」『現代のエスプリ 428 才能教育の展開』東京：至文堂 165-175。

- ・吉本隆行・大城康宏・中山裕一郎・新谷勝造・池田京子・中島卓郎・斎藤忠彦 2002 「スズキ・メソッドの現在と課題」『信州大学教育学部紀要第 107 号』 53-64。
- ・Blaker, S. L. 1995. *A survey of Suzuki violin program in community music school in the United States*. Ohio: The Ohio State University.
- ・Gordon, E. E. 1997. *Learning sequences in music: Skill, content and patterns*. Chicago: GIA.
- ・Griffin, R. C. 1989. *The Suzuki approach applied to guitar pedagogy*. Miami: University of Miami.
- ・Helsh, S. S. 1995. *Music educator Shinichi Suzuki: His teacher development program and studio teaching*. Minnesota: University of Minnesota.
- ・Lo, S. Y. 1993. *A reading course for Suzuki piano students*. Texas: Texas Tech University.
- ・Moorhead, M. N. 2005. *The Suzuki Method: A comparative analysis of the perceptual / cognitive listening development in third grade students trained in the Suzuki, traditional, and modified Suzuki music methods*. Florida: University of South Florida.
- ・O'neil, A. A. M. 2003. *Parent as home teacher of Suzuki cello, violin, and piano students: Observation and analysis of Suzuki Method practice sessions*. Ohio: The Ohio State University.
- ・Perkins, M. M. 1993. *A comparative study of the violin playing techniques developed by Kato Havas, Paul Rolland, and Shinichi Suzuki*. Washington, D. C.: The Catholic University of America.
- ・Rea, S. J. 1999. *The Suzuki flute method: A history and description*. Florida: The Florida State University.
- ・Sperti, J. 1970. *Adaptation of certain aspects of the Suzuki method to the teaching of the clarinet*. New York: New York University.
- ・Starr, William. J. 1999. *The Suzuki Violinist*. USA: Alfred Publishing.
- ・Yuet-Din, L. S. 1993. *A reading course for Suzuki piano students*. Texas: Texas Tech University.

● E web サイト

- ・音楽教室スズキ・メソッド 公益社団法人才能教育研究会  
 〈<http://www.suzukimethod.or.jp/>〉 (2015 年 9 月 30 日閲覧)

## A Study of Teachers' Beliefs in the Suzuki Method.

Masayuki SUZUKI

The Suzuki Method, a music education system developed by Shinichi Suzuki (1988–1998), has been valued in the world. However, it is not so much appreciated in Japan where it was born. There has been some research about Shinichi Suzuki in Japan. Therefore, his personality and educational philosophy are comparatively well known in Japan. But there has been hardly any research done on the teaching of the Suzuki Method. It is not known what is taught in the lessons. This is the one of reasons why the Suzuki Method has not been understood well.

I investigate the contents in lessons of the Suzuki Method in Japan and the beliefs of the teachers. The purpose of this research is to clarify the Suzuki Method teachers' beliefs and how the teachers grow and develop through the lessons.

In order to accomplish these purposes, I interviewed teachers using the Suzuki Method. They are examined in two groups. The first is “*Young teacher group*”. Teachers of this group are teachers in their 20s & 30s, who became teachers after the death of Shinichi Suzuki. The second is “*Mature teacher group*”. Teachers in this group have been teaching for more than 15 years using the Suzuki Method.

I used the *Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)* by Yasuhito Kinoshita, to investigate what the teachers said. The analysis suggests that the two groups share a lot of beliefs, such as regarding educational philosophy, the purposes of education, and teaching methods, regardless of the difference in their ages. Particularly, it seems that the teachers of both groups value Shinichi Suzuki's philosophy and writings.

On the other hand, the method of reading scores varies. When to start reading scores, how to use instruction materials and how to instruct are different depending on the teacher. This shows that the Suzuki Method doesn't have a set method of reading scores.

In addition, there are some cases in which the difference in teaching experience seemed to affect educational philosophy. It shows that the teachers of the Suzuki Method grow through teaching experience just as school teachers do.

The data from M-GTA is presumptive and limited. Hereafter, it is important to do statistical research into more teachers of the Suzuki Method. With further research, the Suzuki Method teachers' beliefs and the problems of the Suzuki Method will become clearer. In so doing, the data of this research will be useful. I will continue the research on teachers and students of the Suzuki Method.

## スズキ・メソッド指導者の指導観に関する一考察

鈴木雅之

鈴木鎮一（1988-1998）の考案した音楽教育スズキ・メソッドは、世界で高い評価を受けてきた。しかし、発祥の地である日本では、あまり高く評価されていない。日本にも、鈴木鎮一を対象とした研究は複数存在している。そのため、鈴木の人間性や教育哲学は、日本でも比較的知られている。しかし、スズキ・メソッドの指導者を対象とした研究はほとんど存在しない。レッスン内容は、ほとんど知られていないのである。このことが、スズキ・メソッドがよく理解されない理由の一つである。

この研究では、日本のスズキ・メソッド指導者を対象に、レッスンにおける実践と指導者達の指導観を調査した。研究の目的は、スズキ・メソッド指導者の指導観と、スズキの指導者がどのように成長するかを明らかにすることである。

これらの目的を達成するために、スズキ・メソッド指導者へのインタビュー調査を行った。調査には2つのグループが存在した。1つは「若手指導者群」である。このグループは、鈴木の没後に指導者になった20代と30代の指導者達である。もう1つのグループは「ベテラン指導者群」である。このグループは、15年以上スズキ・メソッドの指導をしている指導者達である。

分析には、木下康仁の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いた。分析の結果、2つのグループは、年代の差に関わらず、教育哲学・指導の目的・指導法などの指導観を共有していることが示唆された。特に、両群の指導者とも、鈴木の哲学や言葉を重視しているように思われた。

一方、読譜の指導法は統一されていなかった。読譜の導入、教材、方法は、指導者ごとに異なっていた。スズキ・メソッドは、読譜学習が明確でないことが明らかになった。

また、指導経験の差が教育哲学に影響を与えたと思われる事例が、存在した。このことは、スズキの指導者が、学校の教師などと同じように、経験により成長することを示唆した。

M-GTA から得られたデータは、仮説的・限定的なものである。今後は、より多くのスズキ・メソッド指導者を対象とした量的研究を行うことが重要であろう。そのことにより、スズキ・メソッド指導者の指導観やスズキ・メソッドの問題点がより明確になるであろう。その際、本研究のデータが有用であると考えられる。今後も、スズキ・メソッドの指導者や生徒を対象とした研究を続けていきたい。